

中国からのレポート

建築家 梁 涛 Liang Tom

最新ショッピングモール 「水遊城」で 日中の文化の違いを考える

まだまだ暑さの残る初秋、南京ではちょっと変わった光景が見られるようになった。夕方になると、多くの人たちが連れ立って同じ方向にぞろぞろと列をなして向かうのだ。とてもファッションナブルな若い女性たち、肩を寄せ合い手をつなぐ恋人たち、小さな子供を連れた若い夫婦、そして孫を連れのお爺ちゃん、お婆ちゃんのグループまでも。みんなが向かうのは、南京の商業中心地域新街口から2kmほど東南に完成した真新しいショッピングモール、「水遊城」だ。

この辺は古い繁華街で、孔子を祭る孔廟こうびょうもあり代々続く老舗の商店が並ぶ地域である。そのすぐ横に、「○○商場」や「○○広場」ではなく、「水遊城」という名前で現れた商業施設に、市民は初め戸惑った。

これはテーマパーク？ プールの入った遊戯施設？

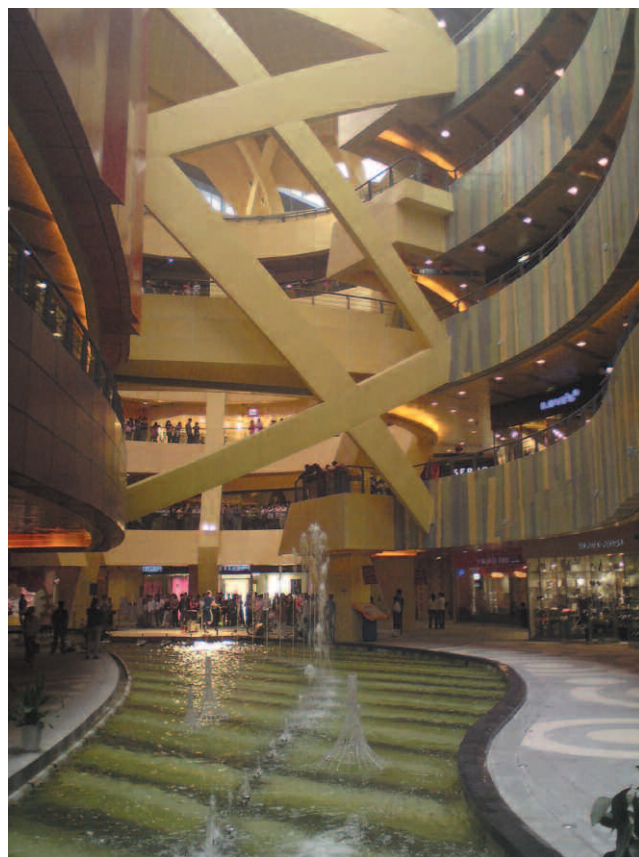
そして、8月29日、まったく新しいコンセプトをもつ商業施設がオープンした。アウトモールとインナーモールが入り組んだ空間構成、6階の屋上噴水から地下1階の人工運河まで轟音ごうおんとともに落ちる滝の眺め、H&M、ZARA、MUJIやUNIQLOなど国際ブランドがもつディスプレイなど、すべてが市民の目を奪い、心をとらえた。

今年1月、私が「水遊城プロジェクト」のコンサルタントとして日本のFJコンサルティングチームに参加したとき、誰もこれほどの規模の施設が年内にオープンできるとは思って

いなかった。ところが16階建てで7万㎡のホテルと9万㎡の商業棟からなるビッグプロジェクトは、構造体すら完成していなかった時点で、約6ヵ月後の夏前に開業すると発表されたのだ。そして、日本にある有名施設をモデルに、その開発と運営に携わったチームをコンサルタントに招き、地元南京の著名商



光、風、そして水。水遊城は普通のショッピングセンターにない要素を取り込んで新しい商業空間を構成している。



複雑に入り組んだ空間は来客に楽しい驚きを与えている。

業施設から有能なスタッフを吸収し、日本チームの指揮のもと進めていった。業種や店舗の構成を整理し、平面計画・動線計画を決めていく作業は、当初は順調に見えていたが、あるときから建設側との衝突が始まった。

大型プロジェクトといえば住宅団地しか経験していない建設側は、自社運営のショッピングモールのイメージもコンセプトも理解できず、個々のテナントが希望する改造や設備の調整などに協力しないのだ。ただただ投資側から要求されたオープン日を第一目標に、運営に必要な諸条件をまったく無視して、ひたすら工事を進めていった。

日中双方が、互いに相手を非協力的だと主張して、文化の違いによる摩擦そのものを見せつけられたような思いだった。建設サイドとコンサルタントサイド、双方からの要望で、コンサルタントチームのメンバーである私が、建設側の技術責任者に着任したのは5月だった。そしてオープン日を夏の終わりに再調整。施設全体の設備工事と同時に、各テナントの内装工事、エクステリアなどが、急ピッチで進められた。

8月29日はグランドオープンの予定だったが、70%の開業。しかしそれでも、来客はもちろん開発サイドも満足していた。日本だったら、大変な苦情がくるかもしれない。これも文化の違いのひとつといえるだろう。中国で何かの仕事を進めるには、前向きでなければならない。たとえ完全ではなくても、完全にしようと続けている姿を見せれば許してくれる。

中心ステージでは、中国人のほか、日本の芸人のパフォーマンスも行われた。それを楽しむ中国人の反応と日本人の反応はまったく同じだ。私は、なんだか安心した。